



鴻の池の犬

笑福亭松

鶴

八

扱て一席申し上げます。毎度お古いお噂で、話と申す物は器用な物で、鳥類畜類、草木、凡ての物に物を言はします。御簾になる竹の上着も皮草履、とか申しまして、御殿の御簾になる竹もあれば、關東煮屋で芋やこんにやくを差す串になる竹も有り、運不運の有る物で、此のお話は大阪船場邊のお話でございます。

「これ、小僧よ、これ、常吉」

「へエ……」

「まだ起すのには早いが、眠ぶたからうけども、一寸起きて下さらんか」

「へエ、なんぞ御用事でござりますか」

「私が今ウツ／＼として居ますと、表でガチャンと音がしたので、塵芥取さんでも来たのか知らんと、^{きいて}聴耳居ましたが、そうでも無い様子ぢや、時節柄、塵芥に石油でもかけて火でも付けられると困る、他家さんから焼けて来る火は仕方が無いが、我家から火は出しとむない、七生人に怨まれて我身が浮ばれんと云ふ事を聞いて居る、一寸表を開けて見てくださらんか」

「へエ(ガラ／＼)ア、旦那はん、ゑらい事だすせ」

「ナニー、ゑらい事や、火事か」

「イーエ」

「なんぢや」

「表に捨兒がしてござります」

「ナニ、捨兒ぢやと」

「へエ」

「可愛い兒を捨てなされる親達にはよくせきの事が有るのぢやろう、そして捨兒の様子は」

「へエ、蜜柑籠に入れて、上から布ふが着せておます」

「蜜柑籠に入れて可哀想に、生れたての兒とみへる、兎に角、此方へ持つて這入つといで」

九